(54) MANIFESTATION PROMOTER AND ITS USE
(11) 5-56781 (A) (43) 9.3.1993 (9) JP
(21) Appl. No. 2-405849 (22) 25.12.19 (33) JP (31) 89p.334751 (32) 26.12.1989

(71) TAKEDA CHEM IND LTD (72) AKIYOSHI TANI(3)

(51) Int. CP. C12N15/11,C12N5/10,C12N15/85//A61K48/00

PURPOSE: To provide a new recombinant DNA useful for allowing a cerebral nerve system cell to specifically produce various proteins.

CONSTITUTION: The objective recombinant DNA contains a promoter region of protein phosphorus-oxidase C gene, e.g. a recombinant DNA containing the promoter region having the base sequence of formula. It can be produced by cloning the promoter of rat PKC-y gene, integrating into an integration vector and inserting an arbitrary structural gene to the downstream of the gene.

CGTGT GGGAGCCAAG ATAACAGACT GGAATGTATT IGGGAGAAAG GGGGTGGACA AGGETTGGAG GAEGTEECCT CETTGEATAG AGGETGEGGA ATGGGAGTGT GCACGTGGAG AGGAGGGAGG GGCAACTGTC ESGGATTCTT GENGETGEGG GGACGCCTTT AAACTGAAAC CCCGCCCCTT GGTCGTCATG GCAACGCCTA CCCCCACCCC CGACTTCTAC ATTTCAGCAG GTGCGGATAG COGAGCTECC GCCCCCCCCC GTGCCTGCGG CT

(54) GENE MANIFESTATION CONTROLLING DNA

(11) 5-56782 (A)

(43) 9.3.1993 (19) JP

(21) Appl. No. 3-221885 (22) 2.9.1991

(71) KYOWA HAKKO KOGYO CO LTD (72) RYOICHI KATSUMATA(1)

(51) Int. Cl³. C12N15/11,C12N1/21,C12N9/10,C12N9/38,C12N9/88,C12N15/17, C12N15/20,C12N15/27,C12N15/54,C12N15/56,C12N15/58,C12N15/60, C12N15/67,C12N15/77,C12P21/02//(C12N1/21,C12R1/15)(C12N1/21, C12R1/13)(C12N1/21,C12R1/01)(C12N9/10,C12R1/15)(C12N9/10, C12R1/13)(C12N9/10,C12R1/01)(C12N9/38,C12R1/15)(C12N9/38, C12R1/13)(C12N9/38,C12R1/01)(C12N9/88,C12R1/15)(C12N9/88, C12R1/13)(C12N9/88,C12R1/01)(C12P21/02,C12R1/15)(C12P21/02, C12R1/13)(C12P21/02,C12R1/01)

PURPOSE: To provide a new DNA having an action to control the manifestation

of structural gene.

CONSTITUTION: A DNA originated from isocitrate lyase (ICL) gene of coryneform group of bacteria. It is integrated into a vector DNA together with a structural gene coding a protein and has an action to control the manifestation of the structural gene when introduced into a host coryneform group of bacteria. For example, a DNA included in the base sequence from the 1st to the 102nd bases of the base sequence of formula. It can be produced by extracting chromosome DNA from a coryneform group bacteria capable of producing glutamic acid, integrating the DNA into a plasmid, etc., transforming a microorganism with the recombinant DNA and separating the clone holding the recombinant DNA containing the objective DNA fragment.

(54) NON-A NON-B HEPATITIS-RELATING NUCLEIC ACID, ANTIGEN, ANTIBODY AND THEIR DETECTION SYSTEM

(43) 9.3.1993 (19) JP (11) 5-56784 (A)

(33) JP (31) 90p.28191 (32) 9.2.1990(2) (21) Appl. No. 3-104010 (22) 8.2.1991

(71) TETSUO NAKAMURA (72) TOSHIHARU MISHIRO(1)

(51) Int. Cl3. C12N15/51,C07K7/08,C07K7/10,C07K13/00,C12N15/06,C12P21/02, C12P21/08,C12Q1/68,C12Q1/70,G01N33/576,G01N33/577//A61K39/00, A61K39/29, A61K39/395(C12P21/02, C12R1/19), C07K99/00

PURPOSE: To provide a new DNA necessary for the diagnosis of non-A non-B

CONSTITUTION: The GORgab DNA having the base sequence of formula. Nucleic NSTITUTION: The GORgab DNA having the base sequence of formula. Nucleic acid is extracted from the plasma of chimpanzee, a cDNA is synthesized with a cDNA synthesis kit according to Gubler method, a cDNA library is prepared by using λ gtll cloning kit and the cDNA is screened by a double antibody method (the 1st antibody is a mixture of plasma of chimpanzee infected with non-A non-B hepatitis, human plasma and plasma of patient of non-A non-B chronic hepatitis; the 2nd antibody is anti-human IgG labeled with a peroxidase). An insert DNA is incised from the obtained GOR 47-1 phage DNA. GOR 47-1 RNA and GOR 47-1 RNAC are prepared from the phage script recombinant using T, and T₂ promoter. The products are labeled with a radioactive isotope to obtain a probe, which is used in the preparation of plural cDNA clones having overlaps with GOR 47-1 from the cDNA library. The clones are linked with each other to obtain the objective GORgab DNA. OWNERS SERVICES COMMETTED SERVICES SERV

(19)日本国特許庁 (JP) (12) 公開特許公報(A)

(11)特許出願公開番号

特開平5-56782

(43)公開日 平成5年(1993)3月9日

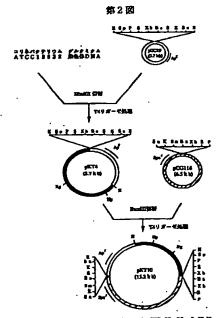
(51)Int.Cl. ⁵ C 1 2 N 15/11 1/21 9/10 9/38	識別記号 ZNA	庁内整理番号 7236-4B 7823-4B 7823-4B	FΙ	技術表示箇所
		8828-4B	C12N	
			審査請求 未請求	t 請求項の数11(全 23 頁) 最終頁に続く
(21)出願番号	特顯平3-221885		(71)出願人	協和醱酵工業株式会社
(22)出願日	平成3年(1991)9	月 2 日		東京都千代田区大手町1丁目6番1号
			(72)発明者	勝亦 瞭一 東京都町田市山崎町1380
			(72)発明者	
				東京都町田市成瀬2-10-2

(54)【発明の名称】 遺伝子発現調節DNA

(57)【要約】

【目的】 遺伝子発現調節DNAおよびそれを用いたタ ンパク質の製造法を提供する。

【構成】 コリネ型細菌のイソクエン酸リアーゼ(IC L) 遺伝子に由来するDNAであって、タンパク質をコ ードする構造遺伝子とともにベクターDNAに組み込ま れ、宿主コリネ型細菌に導入されたときに、該構造遺伝 子の発現を調節する作用を有するDNAおよびそれを用 いて有用タンパク質を効率よく製造する方法。



Ba.BamHI, Bg.BgiII, E.BecRI, H.HindIII, Hp.Hpal, R.Kpul, S.Sail, Sa. Sac I, Sm.Smal, Sp.Sphl, P.Psil, Xb.Xhai ■·コリネパクテリウム·グルナミクム ATCC13032 染色体 DNAMA (6.0kbilledill%)

【特許請求の範囲】

【請求項1】 コリネ型細菌のイソクエン酸リアーゼ (ICL) 遺伝子に由来するDNAであって、タンパク 質をコードする構造遺伝子とともにベクターDNAに組み込まれ、宿主コリネ型細菌に導入されたときに、該構造遺伝子の発現を調節する作用を有するDNA。

【請求項2】 構造遺伝子の発現が、培地中の炭素源を 糖質にしたときに抑制され、培地中の炭素源を非糖質に したときまたは糖質非存在培地で誘導されるものである 請求項1記載のDNA。

【請求項3】 配列番号3に示される塩基配列の第1番から第702番までの塩基配列に包含されるDNAである請求項1記載のDNA。

【請求項4】 構造遺伝子が、ICL、βーガラクトシ ダーゼ、クロラムフェニコールアセチルトランスフェラ ーゼ、インシュリン、成長ホルモン、インターフェロン および顆粒球コロニー刺激ホルモンから選ばれる酵素ま たはタンパク質をコードする遺伝子である請求項1記載 のDNA。

【請求項5】 ICL遺伝子を採取するコリネ型細菌が、コリネバクテリウム属、ブレビバクテリウム属およびミクロバクテリウム属から選ばれるものである請求項1記載のDNA。

【請求項6】 コリネ型細菌が、コリネバクテリウム・グルタミクムATCC13032、コリネバクテリウム・アセトアシドフィラムATCC13870、コリネバクテリウム・アセトグルタミクムATCC15806、コリネバクテリウム・カルナエATCC15991、コリネバクテリウム・ハーキュリスATC C13868、コリネバクテリウム・メラセコーラATCC17965、コリネバクテリウム・リリウムATCC15990、プレビバクテリウム・イマリオフィラムATCC14068、プレビバクテリウム・サッカロリティクムATCC14066、プレビバクテリウム・ディバリカツムATCC14020、プレビバクテリウム・ディバリカツムATCC14020、プレビバクテリウム・フラブムATCC14067、プレビバクテリウム・ラクトファーメンタムATCC13869、プレビバクテリウム・ロゼウムATCC13825 および、ミクロバクテリウム・アンモニアフィラムATCC15354 から選ばれる請求項5 記載のDN

【請求項7】 宿主コリネ型細菌が、コリネバクテリウ 40 ム属、プレビバクテリウム属およびミクロバクテリウム 属から選ばれるものである請求項1記載のDNA。

【請求項8】 宿主コリネ型細菌が、コリネバクテリウム・グルタミクムATCC13032 、コリネバクテリウム・アセトアシドフィラムATCC13870 、コリネバクテリウム・アセトグルタミクムATCC15806 、コリネバクテリウム・カルナエATCC15991 、コリネバクテリウム・ハーキュリスATCC13868 、コリネバクテリウム・メラセコーラATCC17965 、コリネバクテリウム・リリウムATCC15990 、プレビバクテリウム・イマリオフィラムATCC14068 、ブレ 50

ビバクテリウム・サッカロリティクムATCC14066 、プレビバクテリウム・チオゲニタリスATCC19240 、プレビバクテリウム・ディバリカツムATCC14020 、プレビバクテリウム・フラブムATCC14067 、プレビバクテリウム・ラクトファーメンタムATCC13869 、プレビバクテリウム・ロゼウムATCC13825 および、ミクロバクテリウム・アンモニアフィラムATCC15354 から選ばれる請求項7記載の

DNA。 【請求項9】 コリネ型細菌のイソクエン酸リアーゼ (ICL) 遺伝子に由来するDNAであって、タンパク 質をコードする構造遺伝子とともにベクターDNAに組 み込まれて宿主コリネ型細菌に導入されたときに、該構 造遺伝子の発現を調節する作用を有するDNAとタンパ ク質をコードする構造遺伝子とがベクターDNAに組み 込まれた組換えDNA。

【請求項10】 コリネ型細菌のイソクエン酸リアーゼ (ICL) 遺伝子に由来するDNAであって、タンパク 質をコードする構造遺伝子とともにベクターDNAに組み込まれて宿主コリネ型細菌に導入されたときに、該構造遺伝子の発現を調節する作用を有するDNAとタンパク質をコードする構造遺伝子とがベクターDNAに組み込まれた組換えDNAを含む形質転換体。

【請求項11】 コリネ型細菌のイソクエン酸リアーゼ (ICL) 遺伝子に由来するDNAであって、タンパク 質をコードする構造遺伝子とともにベクターDNAに組み込まれて宿主コリネ型細菌に導入されたときに、該構造遺伝子の発現を調節する作用を有するDNAとタンパク質をコードする構造遺伝子とがベクターDNAに組み込まれた組換えDNAを含む形質転換体を培地に培養し、培養物中に該タンパク質を生成蓄積させ、該培養物から該タンパク質を採取することを特徴とするタンパク 質の製造法。

【発明の詳細な説明】

[0001]

30

【産業上の利用分野】本発明はコリネ型グルタミン酸生産菌に由来するDNAであって、構造遺伝子の発現を関節する作用を有する新規DNAおよびそれを利用して有用蛋白質を効率よく生産する方法に関する。

[0002]

【従来の技術】組換えDNA技術が発展し、異種生物の作る有用なポリペプチドを各種微生物に生産させることが可能となっている。しかし、外来遺伝子にもとづいて生産される遺伝子産物が宿主にとって有害である場合、宿主の増殖初期から該外来遺伝子を発現させると宿主は死滅あるいは増殖阻害を受け、該遺伝子産物を多量に作らせることが困難である。このような不都合を回避するためには、宿主微生物の増殖が終了した後に、外来遺伝子の発現を誘導する発現系が必要となる。宿主として最もよく使われている大腸菌では、特定の化合物あるいは物理的条件に応答して作動するプロモーターを利用した

遺伝子の誘導発現系〔Goeddel, D., et.al.,プロシーデ

ィング・オブ・ザ・ナショナル・アカデミー・オブ・サ イエンス (Proc. Natl. Acad. Sci.) U.S.A., 76,106 (1979)、Edman, J. C., et. al.,ネイチャー(Nature), <u>291</u>, 503(1981)、Shimatake, H., et. al.,ネイチャー (Nature), <u>292</u>, 128(1981)] が確立されており、この 系を用いて多岐にわたる有用蛋白質が生産されている。 【0003】一方、組換えDNA技術は各種のアミノ酸 およびプリンヌクレオチド等の発酵生産に使用されてい るコリネ型細菌にも適用可能であり、工業的に実績のあ るこれらの菌種で有用蛋白質を生産させるための検討が 行われている。これまでに、コリネ型グルタミン酸生産 菌で機能するプロモーター検出用ベクターを用いて、レ ポーター遺伝子を構成的に発現させる該菌種のプロモー ターが得られている (特開昭63-273469) が、発現を制 御できるプロモーターについては知られていない。 コリ ネ型細菌で人為的に外来遺伝子の発現を調節する方法に ついては、前述した大腸菌において外来遺伝子の発現を 誘導できる大腸菌のプロモーターをそのままコリネ型グ ルタミン酸生産菌に適用し、該菌種でクロラムフェニコ ールアセチルトランスフェラーゼ遺伝子を誘導発現させ た例がある(特開昭62-151184)。しかし、この発現方 法は大腸菌を宿主とした場合に比べて遺伝子産物の蓄積 量が少なく十分に強力な発現方法とは言い難い。

[0004]

【発明が解決しようとする課題】従って、コリネ型細菌において有用遺伝子産物を効率よく生産させるためには、該宿主で機能し人為的に構造遺伝子の発現を調節できる作用を有するDNAを取得する必要がある。

[0005]

【課題を解決するための手段】本発明者らは、コリネ型 グルタミン酸生産菌において培地などの環境条件によっ て発現が調節される遺伝子を鋭意検索した結果、該菌種 の有するイソクエン酸リアーゼ(以下ICLと表す)遺*

* 伝子の発現が、培地中の炭素源をグルコース、シュークロース、マルトース等の糖質にしたときに抑制され、培地中の炭素源を酢酸、乳酸、エタノール等の非糖質にしたときまたは糖質非存在培地で誘導され、その発現レベルが極めて高いことを見出した。この遺伝子に着目してICL遺伝子をコードするDNA断片をクローン化し、該遺伝子の発現を調節する作用を有するDNAの塩基配列を決定したところ、該DNAは新規なDNAであることおよびこれを用いて所望の遺伝子をコリネ型細菌で効率よく発現させることができることを見出し、これに基づいて本発明を完成するに至った。

【0006】以下、本発明を詳細に説明する。本発明は、コリネ型細菌のICL遺伝子に由来するDNAであって、タンパク質をコードする構造遺伝子とともにベクターDNAに組み込まれ、宿主コリネ型細菌に導入されたときに、該構造遺伝子の発現を調節する作用を有するDNA(以下、ICLプロモーターと表す)、および該ICLプロモーターとタンパク質をコードする構造遺伝子とがベクターDNAに組み込まれた組換えDNAを含む形質転換体を培地に培養し、培養物中に該タンパク質を生成蓄積させ、該培養物から該タンパク質を採取することを特徴とするタンパク質の製造法に関する。

【0007】上記のICLプロモーターは、構造遺伝子の発現が培地中の炭素源を糖質にしたときに抑制され、培地中の炭素源を非糖質にしたときまたは糖質非存在培地で誘導されるという発現制御特性を有している。本発明のICLプロモーターおよびICL構造遺伝子を含むDNAは、コリネ型細菌のうちグルタミン酸生産性を有し、分類学上近縁性の高いいわゆるコリネ型グルタミン酸生産菌から分離採取することができる。コリネ型グルタミン酸生産菌であればいずれも使用できるが、好適には下記の菌株が用いられる。

[0008]

EX. 7	
コリネバクテリウム・グルタミクム	ATCC13032
コリネバクテリウム・アセトアシドフィラム	ATCC13870
コリネバクテリウム・アセトグルタミクム	ATCC15806
コリネバクテリウム・カルナエ	ATCC15991
コリネバクテリウム・ハーキュリス	ATCC13868
コリネバクテリウム・メラセコーラ	ATCC17965
コリネバクテリウム・リリウム	ATCC15990
プレビバクテリウム・イマリオフィラム	ATCC14068
プレビバクテリウム・サッカロリティクム	ATCC14066
プレビバクテリウム・チオゲニタリス	ATCC19240
プレビバクテリウム・ディバリカツム	ATCC14020
プレビバクテリウム・フラブム	ATCC14067
プレビバクテリウム・ラクトファーメンタム	ATCC13869
プレビバクテリウム・ロゼウム	ATCC13825
ミクロバクテリウム・アンモニアフィラム	ATCC15354
3/51///	

30

【0009】コリネ型グルタミン酸生産菌からの染色体 50 DNAの抽出は、例えば特開昭58-126789に記載の方

法、あるいはこれに準じた方法によって行われる。この 染色体DNAからICL遺伝子領域を含むDNA断片を 単離するには、適当な制限酵素で処理した染色体DNA を、同じ制限酵素あるいは同じ接着末端を生じさせる制 限酵素で処理したプラスミドあるいはファージDNAに 組み込んだ後、該組換えDNAで微生物を形質転換し、 目的のDNA断片を含む組換えDNAを含有するクローンを分離することによって達成される。

【0010】例えば、形質転換宿主として大腸菌を、ベ クターとしてプラスミドを使用する場合には、コロニー ハイブリダイゼーション (Hanahan, D. et. al., ジー ン(Gene), <u>10</u>, 63(1980)〕を用い、ICLのアミノ酸配 列の一部をコードする合成DNAと対合するDNA断片 を含有する形質転換体を検出することによって、ICL 遺伝子を含むDNA断片をプラスミドベクター上に有す るクローンを分離することができる。プロープとして使 う合成DNAは、例えばICLを分離後、N末端部分の アミノ酸配列を決定し、その配列に対応するポリヌクレ オチドを公知の方法 [M. H. Caruther et.al.,ケミカル ・シンセシス・オブ・タイトル・ジーン・フラグメンツ (Chemical Synthesis of Gene Fragments) a Laborat orymanual, Verlag, Chemie(1982)] で化学合成したも のを用いればよい。この大腸菌でのクローン化に要する 一連の基本操作は公知であり、モレキュラー・クローニ ング(Molecular Cloning)(1982)コールド・スプリング ・ハーバー・ラボラトリー(Cold Spring Harbor Labora tory)編著に詳しく記載されている。

【0011】上記の方法で得られたクローン化断片が、 ICLプロモーターおよびICLをコードする構造遺伝 子を保持するかどうかは、コリネ型グルタミン酸生産菌 に導入することによって確認することができる。そのた めに、クローン化断片を挿入した上記大腸菌プラスミド にコリネ型グルタミン酸生産菌で自律複製できるベクタ ーを連結するか、あるいはクローン化断片を該コリネ型 グルタミン酸生産菌用ベクターに組み込んだ組換えDN Aを作成する。これらの組換えDNAは、invitro で組 換えた後、コリネ型グルタミン酸生産菌を形質転換し、 目的の構造を有するプラスミドを含有する形質転換体を 得ることによって調製できる。なお、コリネ型グルタミ ン酸生産菌用ベクターとしては、該菌種において自律複 製能を有するものであればいかなるものでもよく、例え ばpCG1 (特開昭57-134500) 、pCG2 (特開昭58 -35197)、pCG4 (特開昭57-183799)、pAM3 30 (特開昭58-67699)、pAG1、pAG3、pA G14、pAG50 (特開昭62-166890) あるいはそれ らから誘導されるプラスミドが使用可能である。コリネ 型グルタミン酸生産菌からプラスミドを調製するには、 例えば特開昭57-134500に記載された方法が用いられ る。また、コリネ型グルタミン酸生産菌の形質転換は、 プロトプラストを使用する方法(例えば特開昭57-1864 92) あるいはエレクトロポレーション法〔アプライド・ミクロバイオロジー・アンド・バイオテクノロジー(App l. Microbiol. Biotechnol.), 30, 283(1989)〕によって行われる。

【0012】上記で調製した組換えDNAでコリネ型グルタミン酸生産菌のICL活性欠損変異株を形質転換し、該形質転換株がICL合成能を獲得していれば、クローン化断片上にICL遺伝子が存在することを確認することができる。ICL活性を保有する野生株を形質転換した場合にも、形質転換体が酢酸、乳酸、エタノール等の非糖質を培地中の炭素源として培養したとき、または糖質非存在培地で培養したときに宿主自体より高レベルのICL活性を発現することを指標にしてICL遺伝子の存在が確認される。これらの形質転換体からブラスミドを抽出し、制限酵素で切断後、アガロースゲル電気泳動によって挿入されたICL遺伝子を含むDNA断片を単離することができる。

【0013】このICL遺伝子含有DNA断片をサブク ローン化し、各種の縮小化断片を含む欠失プラスミドの ICL活性付与能あるいは増幅能を調べることにより I CL遺伝子の存在をさらに限定することができる。IC L遺伝子を含むDNA断片塩基配列はジデオキシヌクレ オチド合成鎖停止法〔ジャーナル・オブ・モレキュラー ・バイオロジー(J. Mol. Biol.), <u>94</u>, 441(1975) 〕ある いはマキサム・ギルバート法 [プロシーディング・オブ ・ザ・ナショナル・アカデミー・オブ・サイエンス(Pro c. Natl. Acad. Sci.),_<u>74</u> , 560 (1977) 〕 などの方法を用 いて決定できる。DNA塩基配列上でICLのN末端ア ミノ酸配列をコードする塩基配列を見出すことによっ て、解読されるオープンリーディングフレームが推定さ れる。オープンリーディングフレームの存在に基づき、 ICLプロモーター活性を含む領域はそのオープンリー ディングフレームの上流に存在していることがわかる。 【0014】このような解析によって、例えば実施例に 示したコリネバクテリウム・グルタミクムATCC13032 の 場合、該菌株のICLプロモーター活性は配列番号3に 示すDNA塩基配列のうち、第1番目から第513番目 までの配列に含まれていると特定することができる。本 発明のICLプロモーター活性は、このDNA配列に限 定されず、プロモーター活性を損なわない範囲で一部を 削除あるいは改変しても構わない。

【0015】ICLプロモーター活性を有するDNA断片の下流に、各種構造遺伝子さらに転写を終止させるターミネーターを配したDNAを前述のコリネ型グルタミン酸生産菌で自律複製できるプラスミドに組み込むことにより、発現ベクターが得られる。ターミネーターとしては、ICL遺伝子のターミネーターが好ましいが、コリネ型グルタミン酸生産菌の他の遺伝子のターミネーターあるいは大腸菌および枯草菌遺伝子由来のρー因子非60 依存性のターミネーター(アニュアル・レビュー・オブ

20

30

50

・ジェネティックス(Ann. Rev. Genet.), 13, 319(1979)] も使用できる。 構造遺伝子としては、 β ー ガラクトシダーゼ、クロラムフェニコールアセチルトランスフェラーゼ、ICLなどの酵素類、あるいはインシュリン、成長ホルモン、 α ー, β ー または γ ー インターフェロン、顆粒球コロニー刺激因子(G ー CSF)などの生理活性蛋白質が挙げられる。

【0016】上記の発現ベクターで宿主を形質転換し、 該形質転換体を培養することによって、目的とする遺伝 子産物を取得することができる。宿主としては、前記の コリネ型グルタミン酸生産菌が好ましいが、その他のコ リネ型細菌も使用することができる。培地中の炭素源と して酢酸、乳酸などの非糖質を用い、その他に窒素源、 無機物、ビタミンなどを含有する培地で形質転換体を培 養することによって、目的の遺伝子産物を培地中に蓄積 させることができる。あるいは形質転換体をグルコー ス、シュークロース、マルトースなどの糖質を炭素 して含む培地でまず増殖させ、糖質が消費されたところ で、上記の非糖質炭素源を添加または糖質非存在培地を 用いて、さらに培養を継続しても遺伝子産物を取得する ことができる。

【0017】培養は通気あるいは攪拌しながら好気的条件下で行う。通常、培養中、培地のpHを中性付近に維持することが好ましい。培養温度、時間などの条件は宿主微生物の増殖および形質転換体の遺伝子産物の産生が最高になるように設定されるが、一般に温度は15~40℃、時間は4~72時間が好適である。培養物中に蓄積された遺伝子産物は、公知の方法、例えば機械的破砕法、あるいは溶菌酵素を用いる方法などによって、菌体を破砕して抽出される。抽出液から目的の遺伝子産物を分離精製するには、通常用いられる蛋白質の精製方法、例えば沈澱剤による沈澱法、透析法、電気泳動法、イオン交換樹脂などによるクロマトグラフ法、ゲル濾過法、抗体カラムを用いる方法などを組み合わせて行うことができる。

【0018】以下に、実施例を挙げて更に具体的に本発明を説明する。

[0019]

【実施例】

実施例1 コリネ型グルタミン酸生産菌のICL遺伝子の発現様式

コリネ型グルタミン酸生産菌であるコリネバクテリウム・グルタミクムATCC13032 、コリネバクテリウム・アセトアシドフィラムATCC13870 、コリネバクテリウム・カルナエATCC15991 、コリネバクテリウム・ハーキュリスATCC13868 、コリネバクテリウム・リリウムATCC15990 、プレビバクテリウム・イマリオフィラムATCC14068 、プレビバクテリウム・ディバリカツムATCC14020 、プレビバクテリウム・フラブムATCC14067 、プレビバクテリウム・ラクトファーメンタムATCC13655 およびミク

ロバクテリウム・アンモニアフィラムATCC15354 各一白 金耳をNB培地(粉末ブイヨン20g、酵母エキス5 g、グルコース10gを水1リットルに含みpH7. 2に 調整した培地)に植菌し、30℃で16時間振とう培養 し増殖させた。この種培養液0.8mlを、酢酸を炭素源と する半合成培地MAYE培地〔酢酸アンモニウム20 g、(NH,)2SO, 10g、尿素3g、酵母エキス1g、KH ₂PO₄ 1 g 、MgSO₄ · 7H₂O 0. 4 g 、FeSO₄ · 7H₂O 2 mg 、 MnSO.・4H₂O 2mg、ビオチン60μg、サイアミン塩酸 塩 2 mg、NaCl 5 0 mgを水 1 リットルに含み p H7. 2 に調 整した培地〕およびシュークロースを炭素源とするMS YE培地〔シュークロース20g、(NH4)2SO410g、 尿素3g、酵母エキス1g、KH₂PO,1g、MgSO,・7H₂O 0.4g、FeSO4・7H2O 2mg、MnSO4・4H2O 2mg、ビオ チン60μg、サイアミン塩酸塩2mg、NaCl 2 0mgを水 1リットリに含みpH7.2に調整した培地]にそれぞれ 接種し、30℃にて16時間培養した。

【0020】菌体を集菌じ、100mMリン酸緩衝液 (pH7.0)で2回洗浄後、同緩衝液5mlに懸濁した。 菌液を氷冷しながら超音波破砕器 (TOMY社製ペンシル型ソニック)で15分間破砕処理した。処理液を4℃にて10分間遠心 (14000 ×g)し、上清を細胞抽出液として回収した。

【0021】この細胞抽出液中のICL活性を、イソク エン酸を基質として生成するグリオキシル酸を定量する 方法 [ジャーナル・オブ・バイオケミストリー(J. Bioch em.), 64, 355 (1968)] によって測定した。予め30℃ に保温した反応液〔Tris-HC10.14M(pH7.5)、MgSO。・7H。 0 20mM、グルタチオン20mM) 2.0mlに、蛋白量30 μ gに相当する細胞抽出液と $20\mu1$ の0.4Mイソクエ ン酸溶液を加えて反応を開始し、30℃で10分間反応 させた。反応液に 1 mlの0.5 Mシュウ酸溶液を加えて反 応を停止させた。さらに0.5mlの1%フェニルヒドラジ ン溶液を加えて70℃、10分間加熱後、氷水中で5分 間冷却した。次いで、2mlの濃塩酸と0.5mlの0.5%フ ェリシアン化カリウム溶液を加えて発色させ、日立比色 計 (モデル100-20) で520nmの吸光度を測定し た。1分間に1μmol のグリオキシル酸の生成を触媒す る酵素活性を1単位(U)とし、蛋白質1mg当りの比活 性を算出し、その結果を表1に示した。蛋白量は、プロ ティン・アッセイキット(バイオラッド社製)を用いて 定量した。

【0022】その結果、いずれの菌株においても、MS YE培地で培養した菌体にはICL活性は微弱かあるい は検出されなかったが、MAYE培地で培養した菌体に は高レベルのICL活性が認められた。グルコース、マ ルトース、グルコン酸などの糖質を炭素源とした培地で 培養した場合にも、シュークロース含有培地の場合と同 様にICL活性は微弱かあるいは検出されなかった。炭 素源として乳酸、エタノール、ピルビン酸などの非糖質 を含む培地で培養した時には、酢酸含有培地の場合と同 レベルのICL活性が検出された。

【0023】以上の結果から、試験に用いた全てのコリネ型グルタミン酸生産菌のICL遺伝子は培地中、糖質を炭素源として培養したときには発現抑制され、非糖質炭素源で培養したときに誘導発現されることが判明した。上記の各種細胞抽出液をラムリィの方法[ネイチャー(Nature), 227,680(1970)]によるSDS-ポリアクリルアミドゲル電気泳動(SDS-PAGE)で解析した。15μg相当の蛋白質を含む細胞抽出液を10%アクリルアミド 10ゲルに載せ、電気泳動後、ゲルを染色液(クマシーブルーR250 0.1%、メタノール50%)で染色し、次いで脱色液(メタノール40%、酢酸10%)で脱色して、染色された蛋白質を観察した。

【0024】その結果、上記グルタミン酸生産菌中一例を除いた全ての菌株において、MAYE培地で培養した菌体中には、約48キロダルトン(kDa)の大きさを有するICL蛋白が著量存在することが確認された。一方、コリネバクテリウム・カルナエATCC15991 についてもMAYE培地で培養した菌体中にのみICL蛋白の著量生20成が認められたが、その蛋白質のサイズは約52kDaであった。しかし、いずれの菌株の場合も、MSYE培地で培養した菌体中には48kDaあるいは52kDaのICL蛋白は殆ど存在していなかった。

【0025】さらに、生成した48kDaあるいは52kDaのICL蛋白の全菌体蛋白に占める割合を求めるために、一次元のデンシトメーター(島津製作所社製 model UV265)を用いて染色ゲルを一方向に走査し、色素濃度の分布を可視吸収(560nm)の度合いで測定した。その結果、MAYE培地で培養した菌体中に、48kDaあるいは52kDaのICL蛋白が全菌体蛋白の5~10%相当量占めることが分かった。なお、MSYE培地で培養した菌体中にはこれらの蛋白質の存在は殆ど検出されなかった。

【0026】また、上記の各種細胞抽出液をコリネバク テリウム・グルタミクムATCC13032のICL蛋白に対す る抗体を用いたウエスタン・プロット法(Towbin, H., プロシーディング・オブ・ザ・ナショナル・アカデミー ・オブ・サイエンス(Proc. Natl. Acad. Sci.) U.S.A., 76, 4350(1979)] による解析を行った。上記で調製した 各種コリネ型グルタミン酸生産菌の細胞抽出液をSDS-ポ リアクリルアミドゲルに載せ、泳動を行った後、ゲルの 上にブロッティング緩衝液 [25mM Tris-HCl、192mM グリシン(pH8.3)]に浸したメンプランフィルター (クリアプロットP膜、アトー社製) を置いた。これを ブロッティング緩衝液に浸した濾紙(ワットマン社製 3 MM) ではさんで、転写装置 (アトー社製) にセットし、 180mA定電流で1時間転写を行った。転写後、フィル ターを1%BSA(牛血清アルプミン)を含むTBS綴 衝液 [20mM Tris-HCl 、0.5M NaCl(pH7.5)] に浸し 50

室温で1時間置いた。

【0027】一方、コリネバクテリウム・グルタミクム ATCC13032 をMAYE培地で生育させた菌体の細胞抽出 液をSDS-ポリアクリルアミドゲルに載せ泳動を行った後、ゲルから48kDa 蛋白質に相当する位置を切取り、0.05%Tween20 を含むTBS緩衝液に懸濁した。この 懸濁液の上清を分取し、マウスに注射してポリクローナル抗体(48kDa 蛋白質抗体)を作製した。

10

【0028】上記の転写処理したフィルターを48kDa 蛋白質抗体および1%BSAを含むTBS緩衝液に浸 し、4℃に一晩置いた。さらに、フィルターを0.05%Tw een20を含むTBS緩衝液で3回洗った後、抗マウスIgG -ペルオキシダーゼ (ダコ社製) および1%BSAを含 trTBS緩衝液に室温で振とうしながら浸した。1時間 後、フィルターを0.05%Tween20を含むTBS緩衝液 で洗浄した。このフィルターを4-クロロー1-ナフト ール (バイオラッド社製) 60mgを溶かした20mlのメ タノールと、60μlの過酸化水素水を含む100mlの TBS緩衝液とを混ぜた液に浸し発色反応を行った。 4 8kDa 蛋白質抗体は、コリネバクテリウム・グルタミク ムATCC13032 だけでなく、コリネバクテリウム・アセト アシドフィラムATCC13870 、コリネバクテリウム・ハー キュリスATCC13868 、コリネバクテリウム・リリウムAT CC15990 、プレビバクテリウム・イマリオフィラムATCC 14068 、プレビバクテリウム・ディバリカツムATCC1402 0 、プレビバクテリウム・フラブムATCC14067 、プレビ バクテリウム・ラクトファーメンタムATCC13655 、ミク ロバクテリウム・アンモニアフィラムATCC15354 の48 kDa のICL蛋白質およびコリネバクテリウム・カルナ エATCC15991 の52kDa のICL蛋白質と反応した。こ のことから、これら蛋白質が同一あるいは極めて類似性 のあることがわかった。

【0029】実施例2 コリネバクテリウム・グルタミ クムATCC13032 のICL遺伝子のクローニング

- (1) ICL蛋白質のN末端アミノ酸配列の決定 コリネバクテリウム・グルタミクムATCC13032 の細胞抽 出液には、48kDa 付近にその他の蛋白質が殆ど検出さ れないので、SDS-PAGEで48kDa のICL蛋白を分離 後、N末端アミノ酸配列を決定した。
- 【0030】実施例1と同様に、MAYE培地で培養したコリネバクテリウム・グルタミクムATCC13032の菌体抽出液を調製し、その3μ1をSDS-PAGEにかけた。泳動後、ゲルを転写用緩衝液〔10mM3-シクロヘキシルアミノー-プロパンスルホン酸、10%メタノール(pH11.0)〕に室温で5分間浸した。トービンらの方法〔プロシーディング・オブ・ザ・ナショナル・アカデミー・オブ・サイエンス(Proc.Natl. Acad. Sci.) U.S.A., 76,4530(1979)〕に従ってゲルの蛋白を予めメタノールに浸したPVDF膜(Millipore 社製、0.45μm ポアサイズ)に転写した。PVDF膜を脱イオン水で5分間洗浄後、クマ

シー染色液 (0.1%クマシーブルー R250、50% メタノール) 中で5分間染色し、次いで脱色液 (40% メタノール、10%酢酸) に5分間浸して脱色した。さらに、PVDF 膜を脱イオン水に 5分間浸して洗浄した後、風乾した。この膜上で染色された48kDaのICL蛋白を切り出し、マツダイラらの方法 [ジャーナル・オブ・バイオロジカル・ケミストリー(J. Biol. Chem.), 262, 10035 (1987)] に従い、N末端アミノ酸配列の決定を行った。

【0031】すなわち、膜上に転写されたICL蛋白質を用いてプロテインシークエンサー(アプライド・バイオシステム社製 model 470)によるエドマン分解を行い、該蛋白質のN末端アミノ酸配列を分析した結果、配列番号1で表されるアミノ酸配列が同定された。

【0032】 (2) オリゴヌクレオチドプローブの合成 上記で決定したアミノ酸配列に対応する塩基配列(配列 番号2)を有するオリゴヌクレオチドを、アプライド・ バイオシステム社製オリゴヌクレオチド合成機 (Model 380A) を用いたホスホラミダイト法 (M. H. Caruther e t. al.ケミカル・シンセシス・オブ・タイトル・ジーン ・フラグメンツ (Chemical Synthesis of Gene Fragment s), a Laboratory manual, Verlag, Chemi (1982)〕に より合成した。

【0033】この50mer オリゴヌクレオチドプローブを $\{\gamma^{xy}\}$ ATP (アマシャム3000Ci/mmol)を用いて5'-ラベル化した。 0.2μ gのプローブDNAを含む15 μ 1のキナーゼ緩衝液〔50mM Tris-HCl、10mM MgC 1_2 、5 mM DTT, 0.1mM EDTA(pH 7.6)〕に10単位のT4ポリヌクレオチドキナーゼ(宝酒造社製)を添加し、37℃で30分間反応させた。さらに、フェノール抽出した反応液をセファデックスG50を用いたゲル濾過に供し、5'末端がラベル化されたプローブを得た。

【0034】(3) コロニーハイブリダイゼーション法 によるICL遺伝子含有断片のクローニング NB培地で培養したコリネバクテリウム・グルタミクム ATCC13032 の種培養液0.8mlを40mlSSM培地〔グル コース20g 、(NH,)₂SO,10g 、尿素 3g 、酵母エキス 1 g 、KH_PO41g、MgSO4·7H_O 0.4g 、FeSO4·7H_O 2m g 、MnSO4・4H4O 2mg 、ビオチン60μg 、サイアミン塩 酸塩 2mg、NaCl 50mg を水 1リットルに含みpH7.2 に調 整した培地〕に接種して30℃で振とう培養した。日立 比色計 (model 100-20) で660 mにおける吸光度(0 D) を測定し、ODが0.2になった時点で培養液へ0.5 単位/mlの濃度となるようにペニシリンGを添加した。 さらに、培養を継続し、ODが0.6になるまで生育させ た。培養液から菌体を集菌し、TES緩衝液〔0.03M Tr is-HC1、0.005M EDTA、0.05M NaCl(pH8.0) 〕で洗浄 後、リゾチーム液〔25% シュークロース、0.1M NaCl 、 0.05M Tris-HCl、0.8mg/mlリソチーム(pH8.0)] 1 0 ml に懸濁し、37℃で2時間保温した。集菌した菌体から サイトウらの方法 [バイオケミカ・エト・バイオフィジカ・アクタ(Biochem. Biophys. Acta.), 72, 619(1963) 」に従って高分子染色体DNAを単離した。一方、pUC19 (宝酒造社製) を保有するE. coli ATCC33694から常法に従ってビルボイムらの方法 [ヌクレイック・アシッド・リサーチ(Nucleic. Acids. Res.), 7, 1513(1979)]によりpUC19を調製した。

12

【0035】コリネバクテリウム・グルタミクムATCC13 032 の染色体DNA5μgを含む緩衝液B [10mM Tris-HCl (pH7.5) , 50mM NaCl , 10mM MgCl₂ , 1mM DTT) 9 8μ1に20単位のHind IIIを添加し、37℃で2時間反応 させた。一方、pUC19プラスミドDNA1μgを含 む緩衝液Β 48.5μlに5単位のHind IIIを添加し3 7℃で1時間反応させた。これら反応物を混合した後、 フェノール抽出、エタノール沈澱を行ってDNAを回収 した。このDNA全量をライゲーション緩衝液〔20mM T ris-HCl (pH7.6) 、10mM MgCl₂ 、10mM DTT、1mM ATP 〕 59μ lに溶解し、さらに350単位のT4リガーゼを添加後、16℃で15時間反応させ連結処理した。 【0036】このDNA反応液を用いてダジェルトらの 方法 [ジーン(Gene), <u>6</u>, 23(1979)] によりE.coli A TCC33694を形質転換した。アンピシリン100μg/ml を含有するLBプレート〔1%トリプトン、0.5%酵母エキ ス、0.5%NaCl (pH7.4)] 上にニトロセルロースフィル ター(Gelman Science 社製、Bio Trace^TNT) をかぶ せ、その表面に形質転換細胞を塗布した。プレートを3 7℃にて16時間置いた後、フィルター上に形成された コロニーを2枚のニトロセルロースフィルターにレプリ カし、計3枚のフィルターをアンピシリン100 µg/ mlを含有するLBプレート上に移して37℃で6時間増 殖させた。レプリカした2枚のニトロセルロースフィル ターを、さらに250μg/mlのクロラムフェニコール および100μg/mlのアンピシリンを含有するLBブ レートに移し、37℃で16時間培養後、0.5M NaOH 液、1.0M Tris-HCl (pH7.5) 液、1.5M NaCl-0.5MTris-H C1(pH7.5)液および 2×SSC 液 [0.3M NaCl 、0.03M Na。 に逐次移してゆき、コロニーから露出したDNAを変性 させた。さらに風乾後、80℃で3時間加熱して、フィ ルター上にDNAを固定させた。一方、残りの1枚のフ ィルターはプレートに乗せたまま4℃で保存した。 【0037】遺伝子ライブラリーが固定化されたレブリ カフィルターを、3×SSC 液 [0.45M NaCl、0.045M Na。 -citrate (pH7.0)) 中で65℃で30分間浸した後、1 ×デンハルト液(0.2%フィコール、0.2%ポリビニルピロ リドン、0.2%BSA) 中に移して65℃で1時間置いた。 フィルターをプレハイプリダイゼーション綴衝液〔1× デンハルト液、1M NaCl、50mM Tris-HCl (pH8.0) 、10 mM EDTA 、0.1%SDS 、100 μg/ml変性サケ精子DNA] が入ったポリプロピレン製の袋に入れ65℃で3時間前

処理した後、放射ラベルされた 50 mer オリゴヌクレオチドプロープ [実施例 2(2)] 0.2μ gを加え、40 \mathbb{C} で 16 時間ハイプリダイゼーション処理した。フィルターをいずれも $6\times SSC$ 液 [0.9M NaCl 、0.09M Na, citrate、(pH7.0)] 中で、順次、 $4\mathbb{C}$ で 5 分間処理を 2回、 $52\mathbb{C}$ で 30 分間処理を 2回、 $4\mathbb{C}$ で 5 分間処理を 2回ずつ行い洗浄した。フィルターを風乾後、X線フィルム (7ジフィルム社製)に密着させ感光させた。

【0038】このようにして、約8500株のクローンの中からハイブリダイズするコロニーを1個見出した。さらに、このコロニーに対応する保存プレート上から単集落分離されたクローンについて再試験した結果、6.0 キロベース(kb)のHindIII 断片をpUC19のHindIII 部位に挿入した構造を有していた。このプラスミドをpKT4と命名した。

【0039】実施例3 ICL遺伝子増幅株におけるI CL遺伝子の発現

(1) コリネバクテリウム・グルタミクムATCC13032(pK T10)のICL遺伝子の発現

前記のクローン化断片上にICL遺伝子が含まれること を明らかにするために、pKT4をコリネ型細菌のベク ターpCG116 (特開平1-265892)に挿入した。pC G116は、pCG116を保有するコリネバクテリウ ム・グルタミクムATCC13032 の培養菌体から次の方法で 単離した。スペクチノマイシン 100 μ g/mlを含有するN B培地で増殖させた p C G 1 1 6 を保有するコリネバク テリウム・グルタミクムATCC13032 の種培養液 8 mlを、 スペクチノマイシン 100μg/mlを含有する 400ml SSM培 地に接種し、30℃にて振とう培養した。ODが0.2に なった時点で、培養液へ0.5単位/mlの濃度となるよう にペニシリンGを添加した。さらに、培養を継続し、O Dが0.6になるまで生育させた。菌体を集菌しTES穏 衝液で洗浄後、リソチーム液10mlに懸濁し37℃で4 時間反応させた。反応液に5M NaCl 2.4ml 、0.5M EDTA (pH8.5) 0.6 ml、4%ラウリル硫酸ナトリウムおよび0.7 M NaClからなる溶液4.4mlを順次添加し、穏やかに混和 してから氷水上に15分間置いた。溶菌物を遠心管に移 し、4℃で60分間、69,400×gの遠心分離にかけ上清 液を回収した。これに重量百分率10%相当のポリエチ レングリコール(PEG 6000)を加え、静かに混和して溶解 後氷水上に置いた。10時間後、1,500 ×gで10分間遠 心分離してペレットを回収した。TES緩衝液5mlを加 えてペレットを再溶解してから1.5 mg/mlエチジウムブ ロマイド2.0m1を添加し、さらに塩化セシウム7.5gを 加えて静かに溶解し密度を1580に合わせた。この溶液を 105,000 ×g、18℃で48時間超遠心分離にかけ、紫 外線照射下に検知される遠心チューブ下方の密度の高い バンドを遠心チューブ側面から注射器で抜き取ることに よって、pCG116プラスミドDNAを分離した。こ の分画液を等容量のイソプロピルアルコール液(容量百 分率 90% イソプロビルアルコール、10%TES緩衝液)で 5回処理してエチジウムプロマイドを抽出除去し、その 後にTES緩衝液に対して透析した。

14

【0040】pCG116プラスミドDNA 1μgを 含む緩衝液C〔10mM Tris-HCl(pH7.5)、100mM NaC 1、10mM MgCl₂、1mM DTT) 19μ1に5単位の BamHIを添加し、37℃で1時間反応させた。一 方、実施例2 (3) で用いた方法によりE.coli ATCC33 694 形質転換体の培養菌体から単離したpKT4プラス ミドDNA 1 μ gを含む緩衝液 4 9 μ l に 5 単位の B a mHIを添加し、37℃で1時間反応させた。これら両 反応液を0.8%アガロースゲル電気泳動で分離した後、 DNA回収精製キット(旭硝子社製)を用いて各々6.5 kbおよび8.7kbの断片として回収した。両DNA断片 を、常法のリガーゼ処理により連結した。このリガーゼ 反応液を用いて、実施例2(3)に従ってE.coli ATCC3 3694を形質転換し、スペクチノマイシン 2 5 μ g を含む LBプレート上でスペクチノマイシン耐性形質転換体を 分離した。該形質転換体のうち、1 つの形質転換体から 第2図に示すプラスミドpKT10を単離した。

【0041】pKT10DNA 1μgをコリネバクテ リウム・グルタミクムATCC13032 のプロトプラスト形質 転換〔ジャーナル・オブ・バクテリオロジー(J. Bacte riol.),<u>159</u> ,306(1984) 〕に供した。プロトプラスト は、次のように調製した。NB培地で増殖させたATCC13 032 株の種培養液0.8mlを40mlSSM培地に接種して 振とう培養した。ODが0.2になった時点で、培養液へ 0.5単位/mlの濃度となるようペニシリンGを添加し た。さらに、培養を継続し、ODが0.6になるまで生育 させた。培養液から菌体を集菌し、10mlのRCGP培 地 [グルコース5g、カザミノ酸5g、酵母エキス2.5g、K₂ HPO, 3.5g, KH,PO, 1.5g, MgCl2 · 6H2O 0.41g, FeSO, • 7H₂O 10mg 、 MnSO₄ • 4 \sim 6H₂O 2mg 、 ZnSO₄ • 7H₂O 0. 9 mg、(NH₄)。Mn₇O₂₄・4H₂O 0.04mg、ピオチン30μg、 サイアミン塩酸塩 2mg、コハク酸ナトリウム 135g 、ポ リビニルピロリドン (分子量 10000) 30g を水1リット ルに含みpHを7.4に調整した培地〕に1mg/mlのリゾチ ームを含む溶液(pH7.6) に懸濁した後、30℃で16時 間静置してプロトプラスト化した。このプロトプラスト 菌液を 2,500×gで5分間遠心分離し、TSMC緩衝液 [10mM MgCl₂、30mM CaCl₂、50mM Tris-HCl 、400mM シュークロース(pH7.5)] 1 mlに懸濁して遠心洗浄後、 TSMC緩衝液0.1mlに再懸濁した。この懸濁液に、上 記に調製したpKT10プラスミドDNA液10μlを 加えて混和し、次いでTSMC綴衝液中に20%PEG 6000 を含む液 0.8mlを添加して混和した。さらに、氷水中で 20分間、37℃で3分間置いた後、 2,500×gで5分 間遠心分離にかけて上清液を除去した。沈澱したプロト プラストを 1 mlのR C G P 培地に懸濁した後、この菌株 0. 2mlをスペクチノマイシン400μg/mlを含むRC

GPプレートに塗布し、30℃で7日間の培養を行い形質転換体を得た。形質転換体に含有されるプラスミドを制限酵素切断解析した結果、形質転換体はpKT10を有することが確認された。

【0042】また、同様にして、公知の方法〔ジャーナ ル・オプ・ジェネラル・アプライド・ミクロバイオロジ ー(J. Appl. Microbiol.),<u>15</u> ,27(1969)〕に従って、 コリネバクテリウム・グルタミクムATCC13032 から酢酸 非資化性変異株として取得したICL欠損変異株を、p KT10プラスミドDNA液を用いて形質転換した。p KT10の導入された該ICL欠損変異株は、酢酸を炭 秦源とするMA培地〔酢酸アンモニウム20g 、(NL)₂SO 410g 、尿素 3g 、KH₂PO41g、MgSO4・7H₂OO.4g、FeSO 4・7H₂O 2mg 、MnSO4・4H₂O 2mg 、ビオチン 60 μg 、 サイアミン塩酸塩 2mg、NaCl 50 mgを水1リットルに含 みpH7.2 に調整した培地〕での増殖能を獲得し、ATCC13 032(pKT10)株と同レベルのICL活性を有していた。こ のことから、pKT10上に存在するコリネバクテリウ ム・グルタミクムATCC13032 由来の6.0kb HindIIIDN A断片は、ICL遺伝子を含むことが確認された。

【0043】コリネバクテリウム・グルタミクムATCC13 032 およびATCC13032 (pKT10)を、シュークロースを炭素源とするMSYE培地および酢酸を炭酸源とするMAYE培地で30℃、16時間培養し、集菌後細胞抽出液を調製した。この細胞抽出液中のICL活性を、実施例1に記載した方法で測定した。結果を表1に示した。コリネバクテリウム・グルタミクムATCC13032 の場合と同様にATCC13032 (pKT10)においてもMAYE培地で培養した菌体が高いICL活性を示し、その活性レベルはATCC13 032 に比べて約6倍高かった。

【0044】両株の細胞抽出液を用いてSDS-ポリアクリルアミドゲル電気泳動で解析したところ、MAYE培地で培養した菌体にのみ多量の48kDaのICL蛋白が検出された。コリネバクテリウム・グルタミクムATCC13032(pKT10)の該蛋白質産生量は、全細胞蛋白質の約33%に相当し、ATCC13032株に比べて5~6倍多かった。以上の結果から、ICL遺伝子は、コピー数を上げたときにも同様に発現調節されることが判明した。

16

前記の実施例3(1)と同様な方法で、表1に示すコリ

ネ型細菌10菌種にpKT10を導入した。ただし、ブ レビバクテリウム・アンモニアゲネスATCC6872へのプラ スミドpKT10の導入は、特開昭63-185372に記載さ れた方法に従って行った。すなわち、NB培地で培養し た本菌の種培養液0.8mlを40mlGIII培地〔グルコー ス15g 、(NH4)₂SO₄8g、尿素 1.2g、酵母エキス 1.2g、 KH_2PO_4 O. 5g, K_2HPO_4 O. 5g, $MgSO_4 \cdot 7H_2O$ O. 1g, $FeSO_4$ • 7H₂O 2mg, ZnSO₄ • 7H₂O 1mg, MnSO₄ • $4\sim$ 6H₂O 1mg, ビオチン 0.1mg、サイアミン塩酸塩 2mg、パントテン酸 カルシウム 10mg、アデニン 100mg、グアニン 100mgを 水 1リットルに含みpH7.2に調整した培地〕に接種し、 30℃にて振とう培養した。対数増殖期の初期(菌体濃 度10°個/ml) に0.3 単位/mlとなるようにペニシリン Gを添加し、さらに3時間培養を続けた。培養液から3, 000rpm、10分間の遠心分離により細胞を回収し、GII I 培地で洗浄後、P 3 高張液 (NaCl 70mM 、MgCl, 5mM 、CaCl₂5mM、Tris-HCl 25mM 、D-ソルビトール1.6M (p 20 H7.6)] に 2.0mg/mlリゾチームおよび 0.6mg/mlアク ロモペプチダーゼを含有する溶液10mlに懸濁し、30 ℃、16時間静置してプロトプラストを調製した。この ようにして調製したプロトプラストを用いて、実施例3

【0046】得られた形質転換体をMSYE培地およびMAYE培地で培養し、その細胞抽出液中のICL活性を測定した。なお、プレビバクテリウム・アンモニアゲネスATCC6872およびATCC6872 (pKT10)のICL活性は、MSYE培地で培養した菌体および該菌体をMAYE培地に懸濁し、30℃、16時間インキュベートした菌体の細胞抽出液を用いて測定した。表1の結果が示すように、コリネバクテリウム・グルタミクムATCC13032 (pKT10)の場合と同様に、いずれのpKT10形質転換体についてもMAYE培地で培養あるいはインキュベートした菌体に高レベルのICL活性が検出された。

(1) に従って形質転換体を得た。

[0047]

【表 1 】

30

表 1

		1CL比活性(U/mg蛋白)		
菌	株	MSYB培地	MAYB培地	
44.5.61	ATCC13032	ND	760	
リネバクテリウム・グルタミクム	ATCC13032(pKT10)	ND	4670	
	ATCC13870	ND	980	
リネバクテリウム・アセトアシドフィラム	ATCC13870 (pKT10)	170	6050	
	ATCC15991	ND	480	
リリネバクテリウム・カルナエ	ATCC15991 (pKT10)	ND	4330	
43 44 64 4 4 4 5 1 1 7	ATCC13868	ND	350	
コリネバクテリウム・ハーキュリス	ATCC13868 (pKT10)	160	1830	
are entry think	ATCC15990	ND	300	
コリネバクテリウム・リリウム	ATCC15990(pKT10)	170	2140	
	ATCC14068	ND	130	
ブレビバクテリウム・イマリオフィラム	ATCC14068 (pKT10)	190	6690	
	ATCC14020	ND	430	
ブレビバクテリウム・ディバリカツム	ATCC14020 (pKT10)	140	3980	
	ATCC14067	ND	550	
プレビバクテリウム・フラブム	ATCC14067 (pKT10)	120	2940	
ブレビバクテリウム・ラクトファーメンタム	ATCC13655	ND	230	
7VE/97194-77171-7774	ATCC13655 (pKT10)	120	2760	
ミクロバクテリウム・アンモニアフィラム	ATCC15354	ND	450	
27W/97799A-173-17174	ATCC15354 (pKT10)	50	4000	
ブレビバクテリウム・アンモニアゲネス	ATCC6872	ND	ND	
/VC/197 994 1 7 C-1 7 TA	ATCC6872 (pKT10)	ND	1730	

ND:検出できず

【0048】実施例4 ICL遺伝子含有断片の解析 (1) クローン化DNA断片の制限酵素地図

プラスミドpKT4DNA 1µgを10~12単位の各制限酵素(AflII、AluI、BglII、ClaI、HindIII、Hpa I、NcoI、NruI、SmaI、SphI、StuI、XhoI)単独または2種類を組み合わせて37℃(SmaI以外の酵素)あるいは30℃(SmaI)で1時間反応した。反応液を0.8%アガロースゲル電気泳動あるいは5%ポリアクリルアミドゲル電気泳動にかけ、生成した切断片のサイズを測定することにより、クローン化された6.0kbのHindIII DNA断片が第1図に示す制限酵素地図からなる構造をもつことがわかった。

【0049】(2) サブクローニングを、同し間咬酵素 で切削したコッポパップラックローンル6. 0kb HindIII-DNA断片上にクローン化されたIC50 タミクムペクタープラスミドpCG116DNAと連結

L遺伝子の所在を特定するために、いくつかの領域をサブクローン化した。 pKT4プラスミド2 μ gを含む緩衝液C 48μ lに10単位のHindIIIとXhoIを加えて、37℃で2時間反応させた。一方、 $pUC192\mu$ gを含む緩衝液C 18μ lに10単位のHindIIIとXhoIを加えて、37℃で2時間反応させた。これら両反応液を0.8%アガロースゲル電気泳動た。これら両反応液を0.8%アガロースゲル電気泳動たで分離した後、DNA回収精製キットを用いて各 α 1.9kbおよび2.7kbの断片として回収した。両DNA断片を、常法のリガーゼ処理により連結した。この反応液を0.8%という連結した。この反応液を0.8%という連結した。この反応液を0.8%の形質転換に供し、ブラスミド0.8%の形質を得た。さらに、0.8%の形質に共し、ブラスミド0.8%のでのである。このに制限酵素で切断したカンスパクテリウム・グルクミクムベクタープラスミド0.8%0には、0.8%0のでは、0.8%0の

30

し、プラスミドpKT13を作製した。また、pKT4からSmaI-BglII2.2kb断片、HpaI-BglII2.1kb断片及びStuI-BglII1.2kb断片を分取後、各々pCGl16のSmaI-BamHIリンカーサイトに挿入連結し、プラスミドpKT19、pKT20、pKT21を作製した。これらのプラスミド上にクローン化されたDNA断片を第3図に示した。

【0050】これらのプラスミドDNAでコリネバクテリウム・グルタミクムATCC13032を形質転換した。形質転換株をMAYE培地で培養し、得られた菌体のICL活性を測定した(第3図)。pKT19保有株とpKT20保有株はpKT10保有株と同レベルの高活性を有していたが、pKT13保有株およびpKT21保有株は宿主とほぼ同レベルの活性しか与えなかった。これらの結果からICL遺伝子は、第3図の上方に矢印で示した2.1kb HpaI-BglIIDNA断片内に位置づけられた。

【0051】 (3) ICL遺伝子領域の塩基配列

ICLをコードするHpaI-BglII 2.1kbDNA断 片を、その断片上に存在する制限酵素サイトで切断し、 対応する制限酵素で切断したプラスミドpUC118、 pUC119(宝酒造社製)に挿入連結した。このよう にして調製したプラスミドを用いてメッシングらのM1 3 チェインターミネーション改良法〔メソッド・イン・ エンザイモロジー(Methods in Enzymology), <u>101</u>, 20 (1983)] に従って塩基配列を決定した。結果を配列番号 3で表されるDNA塩基配列およびICL構造遺伝子に 対応するアミノ酸配列で示す。この塩基配列中には、実 施例2(1)に示したN末端18アミノ酸残基のうち1 7アミノ酸のコドンに対応する配列を含む431アミノ 酸残基からなるオープンリーディングフレーム(1293bp) が見出された。従って、ICLプロモーター活性はAT **G上流のDNA配列に特定された。また、ストップコド** ンTAGから27bp下流には、転写終結に機能すると考 えられる配列(配列番号3で示されるDNA塩基配列の 1833~1846および1850~1863の位置)が存在していた。

【0052】実施例5 コリネ型グルタミン酸生産菌に おけるICL遺伝子の相同性

実施例2 (1) および (2) に記載したICLのN末端 アミノ酸配列に対応する50mer オリゴヌクレオチドあるいは5′非翻訳領域であるHpaIーAflII0.5kb 断片 (配列番号3) をプロープとして、各種コリネ型グルタミン酸生産菌の染色体DNA断片との相同性をリードらのサザンハイブリダイゼーション法〔ヌクレイック・アシッド・リサーチ(Nucleic. Acid. Res.), 13,7207(1985)〕に従って調べた。

【0053】HpaI-AflII 0.5kb断片を調製するために、プラスミドpKT10(第2図、第3図)2μgを含む緩衝液E [10mM Tris-HCl (pH7.5)、40mM KCl、1、10mM MgCl、1mM DTT] 49μ1に10単位のAf

20

1 IIを添加した後、37℃で1時間反応させ、さらに3 μ 1 の1MKC1および10単位のHpaIを添加し、37℃で1時間反応させた。この反応液を1.2%アガロースゲルに載せ電気泳動後、DNA回収精製キットを用いてHpaI-AflII0.5kb断片として回収した。50merオリゴヌクレオチドは実施例2(2)に従い5'末端をラベル化し、HpaI-AflII0.5kb断片はニックトランスレーションキット(宝酒造社製)を用いて[**P]でラベル化した。

【0054】コリネバクテリウム・グルタミクムATCC13 032 、コリネバクテリウム・アセトアシドフィラムATCC 13870 、コリネバクテリウム・カルナエATCC15991 、コ リネバクテリウム・ハーキュリスATCC13868 、プレビバ クテリウム・ディバリカツムATCC14020 、プレビバクテ リウム・ラクトファーメンタムATCC13655 、ミクロバク テリウム・アンモニアフィラムATCC15354 から実施例2 (3) に記載した方法に従って染色体DNAを調製し た。各々の染色体DNA5μgを含む緩衝液B98μl に20単位のHindIII を添加し、37℃で2時間反 応した。これら反応被10μ1をそれぞれ0.8%アガロ ースゲルに載せ電気泳動を行った。泳動後のゲルを0.25 M HC1中に浸し15分間振とうした後、脱イオン水で すすぎ、0.4M NaClをしみこませた濾紙(ワットマ ン3MM) の上に置いた。ゲルの上にナイロンフィルター (BIO-RAD 社製 ゼータプローブメンブレン)、濾紙お よび適当な重しを逐次乗せてゆき、ゲルの下から濾紙越 しに0.4M NaOHを供給してDNAをフィルター上に 転写した。フィルターを6×SSC で洗浄し、風乾してハ イプリダイゼーション実験に供した。このフィルター を、プレハイプリダイゼーション溶液(6×SSC、0.01 M EDTA、1%フィコール、1%ポリピニルピロリドン、1%牛 血清アルプミン、0.5%SDS 、10mg/ml変性サケ精子DNA) 2 Omlに 1 Omg/mlサケ精子変性DNA溶液 0.2ml を加えた溶液に浸し、68℃で3時間加熱した。フィル ターを、プレハイプリダイゼーション溶液 2 0 mlにラベ ル化した各々のプロープ 0.2μg を加えたハイブリダイ ゼーション溶液に移した。50mer オリゴヌクレオチドを プロープとした場合には40℃で16時間、HpaI-A f 1 II 0.5kb断片をプロープとした場合には68℃で 16時間ハイブリダイゼーション処理した。処理したフ ィルターは、SWS (0.3 ×SSC 、0.05% SDS) 中に浸 し、50mer オリゴヌクレオチドをプロープとした場合 には52℃、30分間処理を2回行い、HpaI-Af 1 II 0.5kbをプローブとした場合には68℃、30分間 処理を2回行って洗浄した。各々のフィルターは、風乾 した後、X線フィルム(フジフィルム社製)に密着させ 感光させた。

【0055】その結果、コリネバクテリウム・カルナエ ATCC15991 以外のコリネ型グルタミン酸生産菌では、い ずれのプローブを用いた場合にも約6.0kb の染色体Hi

ndIII DNA切断片とハイブリッドを形成した。一 方、コリネバクテリウム・カルナエATCC15991 において は、いずれのプローブを用いた場合にも約2.0kb のH i n d III 染色体DNA断片とハイブリッドを形成した。 これらの結果から、これらグルタミン酸生産菌のICL 遺伝子は、コリネバクテリウム・グルタミクムATCC1303 2 のICL構造遺伝子領域だけでなく、そのプロモータ 一領域においても相同性を有することが明らかとなっ た。

【0056】実施例6 ICLプロモーターによるクロ ラムフェニコールアセチルトランスフェラーゼ構造遺伝 子の発現

大腸菌のプラスミドpKK232-8は、大腸菌由来の クロラムフェニコールアセチルトランスフェラーゼ遺伝 子領域中、プロモーター配列を除去した翻訳開始に必要 な配列から構造遺伝子までの領域を有し、その下流に大 腸菌リボソームRNA遺伝子由来のターミネーター配列 T₁T₂を配したDNA断片を含んでいる (Brosius. J. ジーン(Gene), <u>27</u> , 151(1984)] 。該DNA断片を 含みグルタミン酸生産菌で複製できるプラスミドpCG KK27-3を第4図に示すように作製した。

【0057】pKK232-8DNA (ファルマシア社 製) 5 µ gを含む緩衝液C 50 µ 1に0.3単位のPst I を添加し、37℃で1時間処理した後、68℃で10 分間加温して反応を停止した。一方、特開昭57-186489 に記載した方法で保有株から調製したグルタミン酸生産 菌ベクターpCG11 (特開昭57-134500)DNA 2μgを 12単位のPst Iを添加した緩衝液C 49μ1中で 37℃で1時間反応させさらに加温処理した。pKK2 3 2 - 8 および p C G 1 1 D N A の各処理液を0.8%アガ ロースゲル電気泳動にかけた後、DNA回収精製キット を用いて各々5.1kb および6.8kb DNA断片を回収し た。両DNA断片を混合し、T4リガーゼを加えて連結 処理した。

【0058】このリガーゼ反応液を用いて、実施例2 (3) に従ってE. coli ATCC33694を形質転換し、スペク チノマイシン25μg/mlを含むLBプレート上でスペ クチノマイシン耐性形質転換体を分離した。形質転換体 から抽出したプラスミドDNAを制限酵素で切断解析 し、眩形質転換体のうちの1つの株から第4図に示すよ うにpKK232-8とpCG11が連結されたプラス ミドpCGKK27-3を取得した。

【0059】さらに、pCGKK27-3DNAでコリ ネバクテリウム・グルタミクムATCC13032 を実施例 3 (1) に記載した方法で形質転換した。スペクチノマイ

シン耐性で選択された形質転換体は、pCGKK27-3を保有していたが、クロラムフェニコール耐性を示さ ず、クロラムフェニコールアセチルトランスフェラーゼ 構造遺伝子はATCC13032 株でも発現しないことを確認し*

*た。

20.

【0060】次に、ICLプロモーター活性を含むDN A断片をpCGKK27-3に組み込んだ(第5図参 照)。ICLプロモーター含有断片として、第3図に示 す0.6kbのSmaI-AluI断片を用いた。pKT1 9 DNA 5 μ g を緩衝液D [10mM Tris-HCl (pH7.5) 、20mM KC1、10mM MgCl $_2$ 、1mM DTT) 4 9 μ 1 中で 1 0単位のSma Iを添加して30℃、1時間処理した 後、0.2M KCl 6 μ l および l 0 単位の A f l IIを添加 し37℃で1時間反応した。反応液を1%アガロースゲ ルに載せ、電気泳動後DNA回収精製キットを用いて0. 8kbのSmaI-AflIIDNA断片を単離した。この DNAを含む緩衝液A [10mM Tris-HCl (pH7.5) 、10mM MgCl₂、1mM DTT] 49μlに10単位のAluIを 添加して、37℃、1時間反応した後、68℃、10分 間加熱処理し、SmaI-AluIDNA断片含有液を 調製した。

22

【0061】一方、コリネバクテリウム・グルタミクム ATCC13032 の形質転換体から単離した p C G K K 2 7 -3DNA 5μgを、緩衝液D 49μ1中で10単位 のSmaIを添加して、30℃、1時間反応させさらに 加熱処理した。このpCGKK27-3DNA含有液と 前記のSmaI-AluIDNA断片含有液を混合し、 常法によりリガーゼ処理した。処理液を用いてコリネバ クテリウム・グルタミクムATCC13032 を形質転換し、菌 液を酢酸アンモニウム10mg/ml、スペクチノマイシン 4 00μg /mlおよびクロラムフェニコール5μg/mlを含 有するRCGPプレート上に塗布した。30℃で7日間 培養して形質転換体のコロニーを得た。その1株から、 クロラムフェニコールアセチルトランスフェラーゼ構造 遺伝子含有DNA断片の直前に、SmaI-AluID NA断片を組み込んだプラスミドpKT22が取得され た (第5図参照)。

【0062】この形質転換株およびATCC13032 株をMS YE培地およびMAYE培地で30℃で16時間培養し 集菌した。該菌体を破砕し、得られた細胞抽出液中のク ロラムフェニコールアセチルトランスフェラーゼ活性 を、シャウらの方法〔メソッド・イン・エンザイモロジ ー(Methods in Enzymology), 43,737(1975)] に従っ て測定した。1分間に1 μ mol のクロラムフェニコール のアセチル化を触媒する酵素活性を1単位と定義した。 【0063】上記と同様な方法で、表2に示すコリネ型 細菌 5 菌種に p K T 2 2 を各々導入し、得られた形質転 .換体をMSYE培地およびMAYE培地で培養し、その 細胞抽出液中のクロラムフェニコールアセチルトランス フェラーゼ活性を測定した。結果を表2に示す。

[0064]

【表 2】

		クロラムフェニコールアセチルトランスフェラーゼ 比活性(U/mg蛋白)		
菌	株	MSYE培地	MAYB培地	
コリネバクテリウム・グルタミクム	ATCC13032	0	0	
	ATCC13032(pKT22)	0. 6	27. 4	
コリネバクテリウム・ハーキュリス	ATCC13868	0	0	
	ATCC13868(pKT22)	0. 2	13. 2	
ブレビバクテリウム・ディバリカツム	ATCC14020	0	0	
	ATCC14020(pKT22)	0. 5	25. 8	
ブレビバクテリクム・ラクトファーメンタム	ATCC13655	0	0	
	ATCC13655(pKT22)	0. 3	22. 0	
プレピバクテリウム・アンモニアゲネス	ATCC6872 ATCC6872 (pKT22)	0 0.1	0 12. 6	

【0065】表2に示したように形質転換株は、MAY E培地で培養した時、高レベルのクロラムフェニコール アセチルトランスフェラーゼを産生していることが認め られた。著量のクロラムフェニコールアセチルトランスフェラーゼは、SDSーポリアクリルアミドゲル電気泳動解析において24kDa の蛋白バンドとして観察された。以上の結果から、クロラムフェニコールアセチルトランスフェラーゼ構造遺伝子はICLプロモーターにより誘導的に発現していることが確認された。

【0066】実施例7 ICLプロモーターによるβ-ガラクトシダーゼ構造遺伝子の発現

ICLプロモーターにより大腸菌のβーガラクトシダーゼ構造遺伝子を発現する発現べクターの作製を試みた。 第6図に工程の概略を示した。

【0067】ICL遺伝子を含むプラスミドpKT20 10μgを含む緩衝液C 98μlに24単位のStu Iを添加し、37℃で2時間反応後、等量のフェノールで1回抽出した。さらに、等量のクロロホルム/イソアミルアルコール (24/1, v/v)で1回抽出し、エタノール沈澱後真空乾燥した。このDNAをキロシークエンスディレーションキット(宝酒造社製)を用いてエキソヌクレアーゼIIIによる欠失処理をした。これら欠失断片を含む緩衝液C 48μlに20単位のXhoIを添加し、37℃で2時間反応させた。

【0068】一方、βーガラクトシダーゼ構造遺伝子含有DNA断片をプラスミドpE'lacl(特開昭63-273469)から調製した。該プラスミドは、大腸菌ラクトースオペロン中βーガラクトシダーゼ構造遺伝子のN末端から8番目のアミノ酸のコドンから上流の配列が欠如したDNA配列を含んでいる。pE'lacl DNA5μgを含む緩衝液D 49μlに10単位のSmalを添加し、30℃で2時間反応させた。さらに1.5μlの

5 MNaClと10 単位のS all を添加し、37 Cで 2 時間反応させた。プラスミドp KT 20 およびp E' laclの切断片を各々0.8%アガロースゲル電気泳動で分離した後、DNA回収精製キットを用いて各々約7.6k b および6.2kb の断片として回収した。両者を常法のリガーゼ処理により連結した。

【0069】このリガーゼ処理液を用いてコリネバクテリウム・グルタミクムATCC13032 を実施例3(1)の方法に従って形質転換した後、菌液をスペクチノマイシン400μg/ml、5ープロモー4ークロロー3ーインドリルーβーDーガラクトシド(Xーgal)40μg/ml及び酢酸アンモニウム0.01g/mlを含有するRCGPプレート上に塗布した。30℃、7日間培養後、このプレート上で青く染まった形質転換体が得られた。該形質転換体のうちの1つは、6.2kbのラクトースオペロン由来DNA断片がICL遺伝子含有DNA断片内に挿入されたプラスミドpKT23を保有していた(第6図参照)。

【0070】この形質転換体とコリネバクテリウム・グルタミクムATCC13032をMSYE培地およびMAYE培地にて30℃で16時間培養し集菌した。菌体を破砕し、細胞抽出液のβーガラクトシダーゼ活性を測定した。βーガラクトシダーゼ活性の測定は、ミラーらの方法[エクスペリメント・イン・モレキュラー・ジェネティクス(Experiments in Molecular Genetics), 352、コールド・スプリング・ハーバー・ラボラトリー(Cold Spring Harbor Laboratory)(1972)〕に従って行った。1分間に1μmolのOーニトロフェノールの生成を触媒する酵素活性を1単位とし、蛋白質1mg当りの比活性を算出した。

【0071】上記と同様な方法で、表3に示すコリネ型 細菌4菌種にpKT23を各々導入し、得られた形質転

72]

26

換体をMSYE培地およびMAYE培地で培養し、その 細胞抽出液中のβーガラクトシダーゼ活性を測定した。 結果を表3に示す。 *【0072】 【表3】

ች

表 3

	•	β - ガラクトシダーゼ 比活性(U/mg蛋白)		
菌	株	MSYE培地	MAYB培地	
コリネバクテリウム・ゲルタミクム	ATCC13032 ATCC13032(pKT23)	0 700	30900	
コリネバクテリウム・ハーキュリス	ATCC13868	0	0	
	ATCC13868 (pKT23)	300	14400	
ブレビバクテリウム・ディバリカツム	ATCC14020	0	0	
	ATCC14020(pKT23)	500	27500	
ブレビバクテリウム・ラクトファーメンタム	ATCC13655	0	0	
	ATCC13655(pKT23)	350	22700	

【0073】その結果、形質転換体のみが、MAYE培 地で培養したときに高レベルのβーガラクトシダーゼを 産生していた。著量の β -ガラクトシダーゼが、SDS-ポリアクリルアミドゲル電気泳動解析において116 kDa より少し大きい蛋白バンドとして検出された。さら に、pKT23上でのICL遺伝子領域の5'側のDN A断片とβーガラクトシダーゼ構造遺伝子の結合位置を 調べた。pKT23DNA 2μgおよびプラスミドp UC118DNA (宝酒造社製) 2μgをそれぞれに含 む緩衝液A49μlに、それぞれ10単位のKpnlを添 加し、37℃で2時間反応させた。さらに、0.5 µ 1 の 5MN a C l と 1 0 単位のB a mH I を加えて滅菌水で 反応液量を55μ1に調整し、37℃で2時間反応させ た。これらpKT23およびpUC118切断片処理物 を、各々0.8%アガロースゲル電気泳動にかけ、各々約 0.7kbおよび7.2kbの断片をDNA回収精製キットを用 いて回収した。両者を常法のリガーゼ処理により連結し た後、実施例4 (3) に従って塩基配列を決定した。

※【0074】その結果、配列番号4で示されるイソクエン酸リアーゼのN末端から63番目までのアミノ酸をコードするDNA断片にN末端8アミノ酸を欠くβーガラクトシダーゼ構造遺伝子がインフレームで連結されていることがわかった。以上の結果から、ICLプロモーターの支配下にβーガラクトシダーゼ融合蛋白が誘導的に合成されることがわかった。

[0075]

【発明の効果】本発明によれば、コリネ型細菌において 有用遺伝子産物を効率よく生産させるための遺伝子発現 調節DNAを提供することができる。

[0076]

【配列表】配列番号:1

配列の長さ:18 配列の型:アミノ酸 トポロジー:直鎖状 配列の種類:ペプチド

フラグメント型:N末端フラグメント

配列

1

Ser Asn Val Gly Lys Pro Arg Thr Ala Gln Glu Ile Gln Gln Asp Asp

Asp Thr

10

15

【0077】配列番号:2

配列の長さ:50 配列の型:核酸 鎖の数:一本鎖 ハイポセティカル配列:Yes アンチセンス:Yes

フラグメント型:N末端フラグメント

★配列の種類:他の核酸 合成DNA

トポロジー: 直鎖状 配列

GTATCATCAT CCTGCTGGAT TTCCTGGGCG GTGCGTGGCT TGCCAACGTT 50 配列の長さ: 2 1 3 5

【0078】配列番号:3

27	20
配列の型:核酸	* terium glutamicum)
鎖の数:二本鎖	株名:ATCC 13032
りが、一个場 トポロジー:直鎖状	配列の特徴
	・ 特徴を表す記号:mat peptide
配列の種類:Genomic DNA	存在位置:5141806
起源 ペルクミクト(Corvne)	and the second s
生物名:コリネバクテリウム グルタミクム(Coryne	bac i i i i i i i i i i i i i i i i i i i
配列	GAAA AGCACTCTGA CTACCTCTGG AATCTAGGTG 60
GTTAACGGTT GTGAAAACIC 1111AA	ATTO TOTTTCCCCA TCTGATCAGA CTAAGTGATC 120
CCACTCTTCT TTCGATTTCA ACCCLT	AIG IGITIGOGGA TOTOATOAGA GAZZOTOTO
ACCGTCACCA GCAAAAGGGG TTTGCG	AACI TIACIAAGIC ATTACOCCOG COMMISSION
ACTITIATOT AGGICACACC TICGAA	ACCI ACGGAACGII GCGGIGGOIG CHIIII
TTTCAGAGCA TTTGCCCAGT ACATCC	GTAC TAGCAACTCC CCCGCCCACT TTTTCTGCGA 300
AGCCAGAACT TTGCAAACTT CACAAC	AGGG GTGACCACCC GCACAAAACT TAAAAACCCA 360
AACCGATTGA CGCACCAATG CCCGAT	GGAG CAATGTGTGA ACCACGCCAC CACGCAAACC 420
GATGCACATT ACGTCGAAAC AGTGAC	AGTG CATTAGCTCA TACTTTGTGG TGGCACCGCC 480
CATTGCGAAT CAGCACTTAA GGAAGT	GACT TTG ATG TCA AAC GTT GGA AAG CCA 534
	Met Ser Asn Val Gly Lys Pro
	1 5
CGT ACC GCA CAG GAA ATC CAG	CAG GAT TGG GAC ACC AAC CCT CGT TGG 582
Arg Thr Ala Gln Glu Ile Gln	Gln Asp Trp Asp Thr Asn Pro Arg Trp
10	15 20
AAC GGC ATC ACC CGC GAC TAC	ACC GCA GAC CAG GTA GCT GAT CTG CAG 630
Acr Cly Ile Thr Arg Asp Tyr	Thr Ala Asp Gln Val Ala Asp Leu Gln
25 30	35
20	ACT CTT GCT GCC GCG GCT CAG AGA TCC 678
Clar Com Vol. The Chu Ghu His	Thr Leu Ala Ala Ala Gln Arg Ser
45	50 55
	AAG GTG ACG GAT ACA TCA ACG CTT GGC 726
TOT GGG ACG CAG TCA CCC ACG	Lys Val Thr Asp Thr Ser Thr Leu Gly
	65 70
60	GTT CAG CAG GTT CGT GCA GGC CTG AAG 774
GCA CTC ACC GGT AAC CAG GCI	Wal Cla Cla Val Arg Ala Gly Leu Lys
	Val Gln Gln Val Arg Ala Gly Leu Lys 80 85
75	35
GCT GTC TAC CTG TCC GGT TGC	CAG GIC GCA GGI GAC GOO INTO GIO TITO
Ala Val Tyr Leu Ser Gly Tr	o Gln Val Ala Gly Asp Ala Asn Leu Ser 95 100
90	50
GGC CAC ACC TAC CCT GAC CAC	ICC CIC INC CON GOO ING TOO GIT TO
	n Ser Leu Tyr Pro Ala Asn Ser Val Pro
105	
AGC GTC GTT CGT CGC ATC AA	C AAC GCA CIG CIG CGI TOO GITT SIET
Ser Val Val Arg Arg Ile As	n Asn Ala Leu Leu Arg Ser Asp Glu Ile
120 125	130 135
GCA CGC ACC GAA GCG ACA CC	T CCG TTG ACA ACT GGG TTG TCC CAA TCG 966
Ala Arg Thr Glu Ala Thr Pr	o Pro Leu Thr Thr Gly Leu Ser Gln Ser
140	145
TCG CGG ACG GCG AAG TGG CT	T CGG TGG AGC ACT CAA CGT CTA CAA CTC 1014
Ser Arg Thr Ala Lys Trp Le	u Arg Trp Ser Thr Gln Arg Leu Gln Leu
155	160 165
CAG AAG GCA ATG ATC GCA GC	T GGC GCT GCA GGC ACC CAC TGG GAA GAC 1062
Gln Lvs Ala Met Ile Ala Al	a Gly AEO Ala Gly Thr His Trp Glu Asp
OIII DJO NEG ETT EST	

29		30	
170	175	180	
CAC GTC GCT TCT GAA	AAG AAG TGT GGC CA	C CTC GGC GGC AAG GTT CTG 111	0
His Val Ala Ser Glu	Lys Lys Cys Gly Hi	s Leu Gly Gly Lys Val Leu	
185	190	1 9 5	
ATC CCA ACC CAG CAG	CAC ATC CGC ACC CT	G AAC TCT GCC CGC CTT GCA 115	8
Ile Pro Thr Gln Gln	His Ile Arg Thr Le	eu Asn Ser Ala Arg Leu Ala	
200	205	210 215	
GCA GAC GTT GCA AAC	ACC CCA ACT GTT GT	TT ATC GCA CGT ACC GAC GCT 120)6
Ala Asp Val Ala Asn	Thr Pro Thr Val Va	al Ile Ala Arg Thr Asp Ala	
220	22	25 230	
GAG GCA GCA ACC CTG	ATC ACC TCT GAC G	TT GAT GAG CGC GAC CAA CCA 125	54
Glu Ala Ala Thr Leu	Ile Thr Ser Asp Va	al Asp Glu Arg Asp Gln Pro	
235	240	245	
TTC ATC ACC GGT GAG	CGC ACC GCA GAA G	GC TAC TAC CAC GTC AAG AAT 130	02
Phe Ile Thr Gly Glu	Arg Thr Ala Glu G	ly Tyr Tyr His Val Lys Asn	
250	255	260	
GGT CTC GAG CCA TGT	ATC GCA CGT GCA A	AG TCC TAC GCA CCA TAC GCA 13	50
Gly Leu Glu Pro Cys	s Ile Ala Arg Ala L	ys Ser Tyr Ala Pro Tyr Ala	
265	270	275	
GAT ATG ATC TGG ATC	G GAG ACC GGC ACC C	CI ONC OIG and oic act	98
Asp Met Ile Trp Met	t Glu Thr Gly Thr F	Pro Asp Leu Glu Leu Ala Lys	
280	285	290 295	
AAG TTC GCT GAA GG	C GTT CGC TCT GAG 1	IC CON ONE ONE OF THE	46
Lys Phe Ala Glu Gl	y Val Arg Ser Glu F	Phe Pro Asp Gln Leu Leu Ser	
30	v	310	10.4
TAC AAC TGC TCC CC	A TCC TTC AAC TGG 1	ICI GCN CNC OTO GITC COIL SILL	194
Tyr Asn Cys Ser Pr	o Ser Phe Asn Trp S	Ser Ala His Leu Glu Ala Asp	
315	320	325	- 40
GAG ATC GCT AAG TT	C CAG AAG GAA CTC	OUC OUR REG GOO LEG TELL	542
Glu Ile Ala Lys Ph	e Gln Lys Glu Leu (Gly Ala Met Gly Phe Lys Phe	
330	335	340	590
CAG TTC ATC ACC CT	C GCA GGC TTC CAC	ICC CIC AND THE GOO HIS ITS	030
Gln Phe Ile Thr Le	eu Ala Gly Phe His	Ser Leu Asn Tyr Gly Met Phe	
345	350	355	638
GAC CTG GCT TAC GC	GA TAC GCT CGC GAA	GOC ATO NOO TOO TTO OTT	030
Asp Leu Ala Tyr Gl	ly Tyr Ala Arg Glu	Gly Met Thr Ser Phe Val Asp	
360	365	010	686
CTG CAG AAC CGT GA	AG TTC AAG GCA GCT	Oldi Olio ooi ooi	000
		Glu Glu Arg Gly Phe Thr Ala	
	80	300	734
GTT AAG CAC CAG C	GT GAG GTT GGC GCA	GOC THE TTO GHE ONE HAT THE	
		Gly Tyr Phe Asp Gln Ile Ala 405	
395	400		1782
ACC ACC GTT GAC C	CG AAC TUT TUT ACC	NOC GOT THE TELE COT	
		Thr Ala Leu Lys Gly Ser Thr 420	
410	415		1836
		CTACAGG TTCTGACAAT TTAAATCTCC	
Glu Glu Gly Gln P			
425	430	CONTATAT ATCCCCTCCA CAAATCCCCT	1896
CTACATCTGT ACAACG	GATG TAGGGAGIII DL	CCTTATAT ATGCCCTCCA CAAATCCCCT	

31 ATCGTGTGAG ATGTGTTTCA TAGGTGCCCC CAACGTTGCC TGTTGACTGC AAATTTTCCG 1956

AAAGAATCCA TAAACTACTT CTTTAAGTCG CCAGATTAAA GTCGTCAATG AAAGGACATA 2016

CATGTCTATT TCCCGCACCG TCTTCGGCAT CGCAGCCACC GCAGCCCTGT CTGCAGCTCT 2076

CGTTGCGTGT TCTCCACCTC ACCAGCAGGA TTCCCCAGTC CAGCGCACCA ATGAGATCT 2135

【0079】配列番号:4

* 生物名:コリネバクテリウム グルタミクム (Coryneba cterium glutamicum)

32

配列の長さ:702 配列の型:核酸 鎖の数:二本鎖

株名: ATCC 13032 配列の特徴

トポロジー:直鎖状

特徴を表す記号: transit peptide

配列の種類:Genomic DNA

存在位置:514..702

フラグメント型:N末端フラグメント

特徴を決定した方法:E

起源

配列

GTTAACGGTT GTGAAAACTC TTTTAAGAAA AGCACTCTGA CTACCTCTGG AATCTAGGTG 60 CCACTCTTCT TTCGATTTCA ACCCTTATCG TGTTTGGCGA TGTGATCAGA CTAAGTGATC 120 ACCGTCACCA GCAAAAGGGG TTTGCGAACT TTACTAAGTC ATTACCCCCG CCTAACCCCG 180 ACTITIATCI AGGICACACC TICGAAACCI ACGGAACGII GCGGIGCCIG CATTITICCCA 240 TTTCAGAGCA TTTGCCCAGT ACATCCGTAC TAGCAACTCC CCCGCCCACT TTTTCTGCGA 300 AGCCAGAACT TTGCAAACTT CACAACAGGG GTGACCACCC GCACAAAACT TAAAAACCCA 360 AACCGATTGA CGCACCAATG CCCGATGGAG CAATGTGTGA ACCACGCCAC CACGCAAACC 420 GATGCACATT ACGTCGAAAC AGTGACAGTG CATTAGCTCA TACTTTGTGG TGGCACCGCC 480 CATTGCGAAT CAGCACTTAA GGAAGTGACT TTG ATG TCA AAC GTT GGA AAG CCA 534 Met Ser Asn Val Gly Lys Pro

5 1

CGT ACC GCA CAG GAA ATC CAG CAG GAT TGG GAC ACC AAC CCT CGT TGG Arg Thr Ala Gln Glu Ile Gln Gln Asp Trp Asp Thr Asn Pro Arg Trp

20 15

10 AAC GGC ATC ACC CGC GAC TAC ACC GCA GAC CAG GTA GCT GAT CTG CAG 630 Asn Gly Ile Thr Arg Asp Tyr Thr Ala Asp Gln Val Ala Asp Leu Gln

35 30

25 GGT TCC GTC ATC GAG GAG CAC ACT CTT GCT GCC GCG GCT CAG AGA TCC 678

Gly Ser Val Ile Glu Glu His Thr Leu Ala Ala Ala Gln Arg Ser

50 45 702

TCT GGG ACG CAG TCA CCC AGG AAG

Ser Gly Thr Gln Ser Pro Arg Lys

60

[0080]

【図面の簡単な説明】

【図1】第1図はICL遺伝子のHindIII 6. 0 kbク ローン化DNA断片の制限酵素地図を示す。

【図2】第2図はpKT10の作製工程を示す。

【図3】第3図はICL遺伝子のHindIII 6.0kb ク※

※ローン化DNA断片のサプクローニングにおける制限酵 素地図を示す。

582

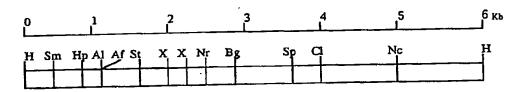
【図4】第4図はpCGKK27ー3の作製工程を示 40 す。

【図5】第5図はpKT22の作製工程を示す。

【図6】第6図はpKT23の作製工程を示す。

【図1】

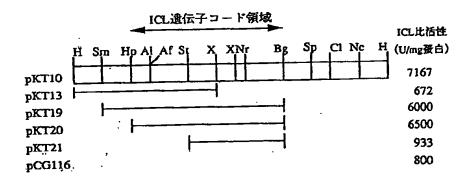
第1図



Al.AluI,Af.AfiII,Bg.BgIII,Cl.ClaI,H.HindIII,Hp.HpaI,Nc.NcoI,Nr.NruI,Sm.SmaI,Sp.SphI,St.StuI,X.XhoI

【図3】

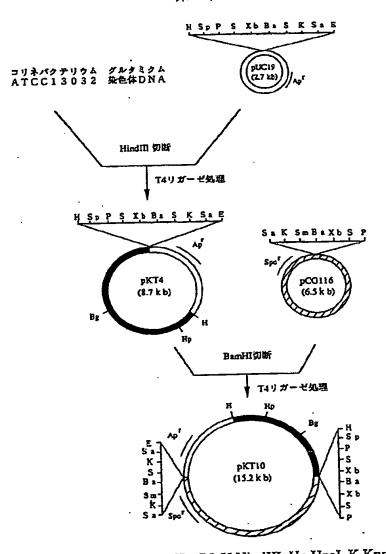
第3図



Al.AluI,Af.AfIII,Bg.BglII,Cl.ClaI,H.HindIII,Hp.HpaI,Nc.NcoI,Nr.NruI,Sm.SmaI,Sp.SphI,St.StuI,X.XhoI

【図2】

第2図

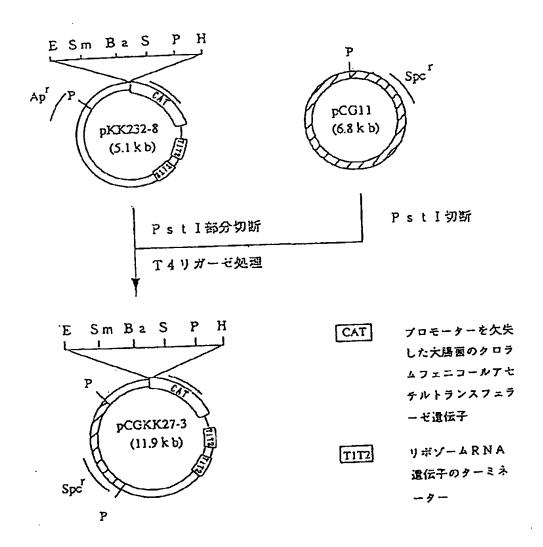


Ba.BamHI, Bg.BglII, E.EcoRI, H.HindIII, Hp.HpaI, K.KpnI, S.SalI, Sa. Sac I, Sm.SmaI, Sp.SphI, P.PstI, Xb.XbaI

■ コリネバクテリウム·グルタミクム ATCC13032 染色体 DNA断片 (6.0kbHindⅢ断片)

【図4】

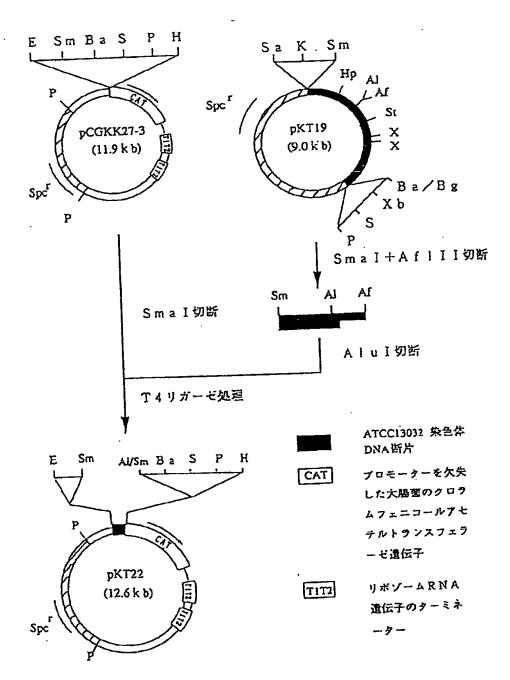
第4図



Ba. BamHI, E. EcoRI, H. Hindlil, S. Sall, Sm. Smal, P. Psti

【図5】

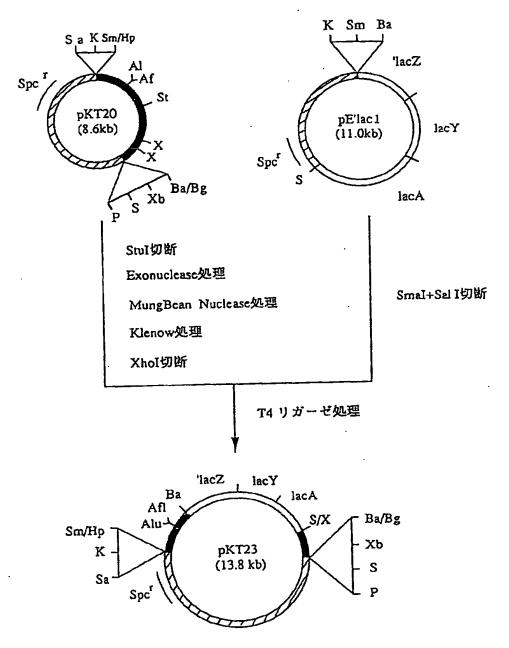
第5図 -



Al. Alui, Af. Afili, Ba. Bamhi, Bg. Bglii, E. EcoRi, H. Hindili, Hp. Hpal K. Kpni, S. Sali, Sm. Smal, St. Stul, P. Psti, X. Xhoi, Xb. Xbal

【図6】

第6図



Al.Alul, Af.Afill, Ba.BamHI, Bg.BglII, E.EcoRI, Hp.Hpal, K.Kpn I, P.Pst I, S.Sal I, Sm.Smal, St.Stul, X.XhoI, Xb.Xba I

ATCC13032 杂色体 DNA 斯片

フロントページの続き

		識別記号	庁内整理番号	F I	=	技術表示箇所
(51) Int. Cl. ⁵	a (00	部以かり記しつ	7823-4B			
	9/88		1020 12			
	5/17					
	5/20					
	5/27					
	5/54					
	5/56					
	5/58					
	5/60					
1	15/67					
1	15/77					
C12P 2	21/02	F				
			H 8214-4B			
		I				
		(C 8214-4B			
//(C12N	1/21					
C 1 2 R	1:15)					
(C 1 2 N	1/21					
C 1 2 R	1:13)					
(C 1 2 N	1/21					
C 1 2 R	1:01)					
(C 1 2 N	9/10					
C 1 2 R	1:15)					
(C 1 2 N	9/10					
C 1 2 R	1:13)					
(C 1 2 N	9/10					
C 1 2 R	1:01)					
(C 1 2 N	9/38					
C 1 2 R	1:15)					
(C 1 2 N	9/38					
C 1 2 R	1:13)					
(C 1 2 N	9/38				•	
C 1 2 R	1:01)					
(C 1 2 N	9/88					
C 1 2 R	1:15)					
(C 1 2 N	9/88					
C 1 2 R	1:13)					
(C 1 2 N	9/88					
C 1 2 R	1:01)					
(C 1 2 P	21/02					
C12R	1:15)					
(C 1 2 P	21/02					
C 1 2 R	1:13)					
(C 1 2 P	21/02					
C 1 2 R	1:01)					
-						